



平成29年 4月26日

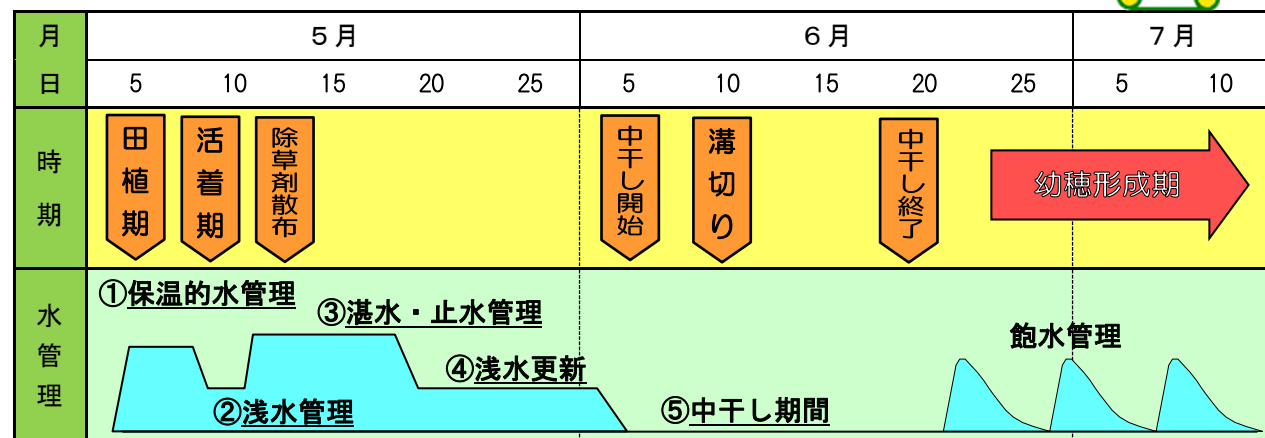
田植後の“水管理”・“病害虫・本田雑草防除対策”

～ 地域全体で「葉いもち対策」・「斑点米カメムシ対策」に取り組みましょう！！～

1. 田植後の水管理

生育に合わせたこまめな水管理で、茎数の早期確保に努めよう！

(1) 田植後の水管理のイメージ（本田除草：一発処理の場合）



(2) 水管理のポイント

① 田植後～活着まで ⇒ “保温的水管理”

3～4 cmのやや深水とし、低温や風による植え傷みを回避する。

② 活着後 ⇒ “浅水管理”

水温の上昇を図り早期分けつを促進する為2～3 cmのやや浅水とします。深水すぎると、日中暖められた水が夜間に下がりきらず藻類が発生しやすくなります（水温25～35℃で発生量多）。また、夜間に暖められた水によって、稲は上に伸びようとするため、ヒョロヒョロな稲姿となります。

③ 初中期一発剤散布時 ⇒ “湛水・止水管理”

粒剤・フロアブル剤は3～5 cm、ジャンボ剤は5～6 cm 除草剤散布後少なくとも3～4日間は通常の湛水状態（水深3～5 cm）を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。（入水は除草剤処理層を壊さないよう静かに行う） → 【裏面参照】

近年は、春先から高温傾向が続き、雑草の生育や藻類・表層はく離の発生時期が早まっています。早めの除草剤使用により、雑草の発生防止に努めて下さい！

除草剤散布前にワキや藻類・表層はく離の発生が見られた場合は、**夜間落水**や「**田んぼの鉄人**」を散布してネ！

④ 中干し開始まで ⇒ “浅水更新”

2～3 cmのやや浅水とし、好天時のワキやアオミドロの発生に注意する。

⑤ 中干し期間 ⇒ “落水管理”

目標茎数が確保されたら速やかに中干し開始。



「水深スケール」を使ってしっかりと水深を確認しよう！



2. 病害虫防除対策

地域全体で、①葉いもち対策、②斑点米カメムシ対策を徹底し、病害虫の発生を防止しよう！！

(1) 葉いもち対策 … 補植苗を速やかに除去しよう！！

補植苗は、いもち病の発生源となり、放置すると広い範囲の伝染源となります。除草剤（初中期一発剤）散布までに補植を終了し、補植苗の速やかな除去を徹底！

(2) 斑点米カメムシ対策 **第1弾** 生育期間全般を通じた雑草管理を徹底しよう！

① 農道・畦畔、雑種地等の雑草管理

5月中下旬から「イネ科雑草（メヒシバ等）種子が結実しない間隔」で草刈り（除草）を徹底する。

② 本田内雑草の発生防止

ヒエ類やイヌホタルイ等の雑草が多発生しないよう水田内の雑草管理を徹底する。



ポイント

ポイント

【斑点米カメムシの発生・被害状況】

- ① 平成28年産における斑点米カメムシの発生状況は、アカスジカスミカメを中心に発生量が多く、斑点米（カメムシ被害）の混入による格落数量は1,791.9俵となりました。【図1】
- ② 近年、発生が増加傾向にあるアカスジカスミカメは発生期間が長く、特にゆきみのりに対する斑点米（カメムシ被害）が拡大しています。【図2】【図3】

図1. 年次別 カメムシ(斑点米の混入)による格落数量

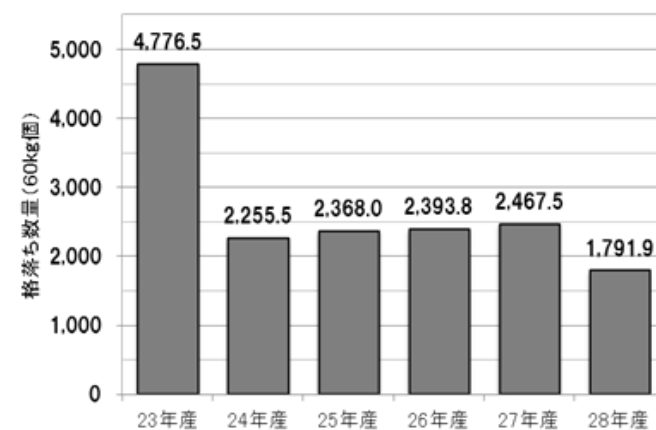


図2. 平成28年産 カメムシ被害の品種別割合

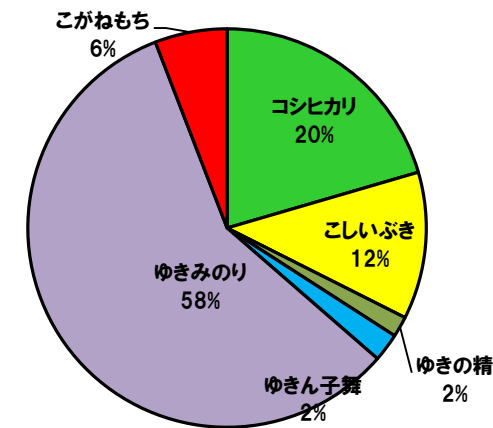
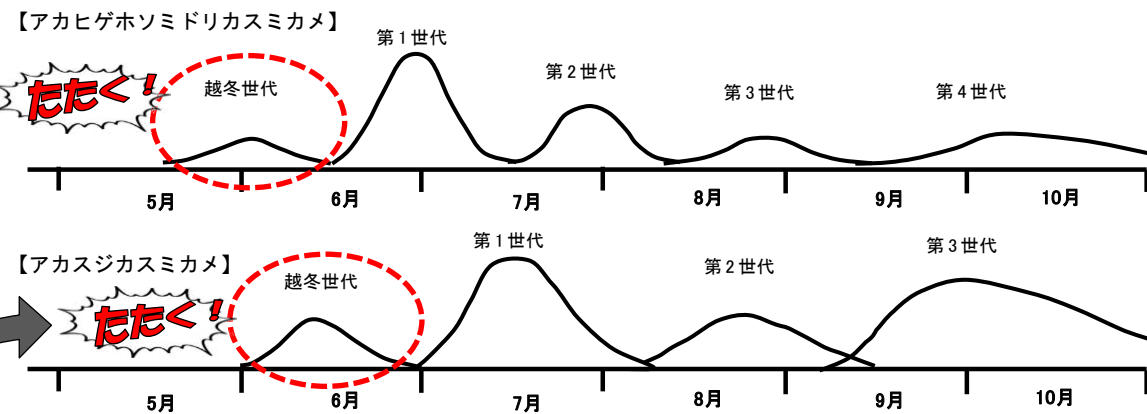


図3. アカヒゲホソミドリカスミカメ成虫、アカスジカスミカメ成虫の発生消長(模式図)



前年の多発生や冬期間の少雪により、「越冬成虫が多い」と推察されることから、地域全体で「春先からの雑草管理」を徹底することにより、「越冬世代をたたく！！」ことが重要なポイントとなります。

裏面参照

3. 本田雑草防除対策

除草剤の散布前に必ずチェックして、的確な雑草防除に努めてネ！

(1) 本田除草剤「散布前・散布時」の確認事項

水稲本田除草剤（一発処理剤）使用時の **10** のチェックポイント

No.	チェック項目（作業のポイント）	チェック
1	畦畔は、しっかり作られている → ねずみ穴等からの漏水がない	<input type="checkbox"/>
2	代かきは、丁寧（均平）に実施されている → 田面が極端に露出していない	<input type="checkbox"/>
3	除草剤成分の拡散に必要な水深（浅い部分で粒剤・フロアブル剤：3～5cm、ジャンボ剤は5～6cm程度）が確保されている = 田面が露出していない	<input type="checkbox"/>
4	水口・水尻はしっかり止めてある → 多少の降雨で水田水がオーバーフローしないよう、水尻は高めにしてある	<input type="checkbox"/>
5	散布時・散布後の天候をチェックする → 散布当日から2日位の間「田面水のオーバーフローが心配される大雨」や「田面水が極端に片寄るような強風」が予想される場合は散布を避ける → ※ フロアブル剤・ジャンボ剤は、特に風雨の影響を受けやすいので要注意	<input type="checkbox"/>
6	使用農薬の登録内容（適用雑草と使用方法等）を確認してから使用する → 代かき後の日数、田植後の日数等を確認しながら、適期に散布する	<input type="checkbox"/>
7	適切な植付深さ（3cm程度）による丁寧な移植が実施されている → 極端な浅植えや植付不良で根が露出したり浮き苗のある場合は、薬害が出やすくなるので要注意	<input type="checkbox"/>
8	田植同時処理を行う場合には、①薬害の発生防止に努めるとともに、②処理時（田植時）はひたひた水状態で水尻を閉じ、作業終了後は適正な水深まで緩やかに湛水する	<input type="checkbox"/>
9	補植は完了している → 除草剤散布直後の補植は、薬害を生じる恐れがある	<input type="checkbox"/>
10	ワキ・アオミドロ等の早発が懸念される場合は、登録内容の範囲内で除草剤を早めに散布する	<input type="checkbox"/>

除草剤の効果を高めるには、丁寧な代かきで“しっかり田面水を保つこと”、“適期・好天日に散布すること”が重要なポイントになります！除草剤散布前から散布後までのポイントをチェックしながら、適正な作業を行って雑草の無い田んぼにしよう！

(2) 本田一発除草剤「散布後」の技術対策

<「除草剤処理後7日間は給水しない止水管理」のイメージ>

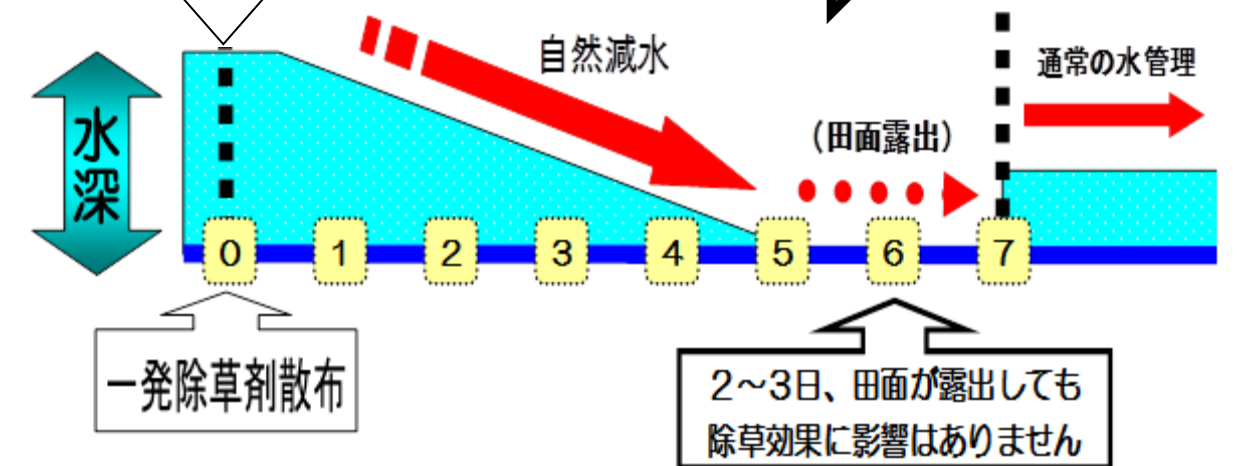
～～除草剤を処理した後「7日間」は、水田内の水が水田外に出ないように排水口を止め、更にその期間は給水も止める方法です～～

<<散布時の水管理チェックポイント>>

チェック項目	チェック
① 畦畔からの漏水を防ぐ	<input type="checkbox"/>
② オーバーフローしないよう排水口をしっかりとふさぐ	<input type="checkbox"/>
③ 水深が浅い部分で3～5cm（ジャンボ剤は5～6cm）になるようたっぷり入水する	<input type="checkbox"/>
④ 給水を止めてから散布する	<input type="checkbox"/>

除草剤散布後から5～7日間は、なるべく給水しないでネ！

5～7日間は給水しない(注)



★ 注意 ★

以下の場合、除草剤の処理層に影響しない程度の弱い水量で給水して田面水位を維持する

- ① 低温対策など、栽培上湛水が必要な場合
- ② 散布後すぐ（散布翌日）に田面が露出するような漏水田
- ③ 田面が露出し、ひび割れが出るほど乾いてしまう場合
→→→ オーバーフローに注意し給水する

水稲除草剤の除草効果を高めるには、除草剤散布後の水管理が最も重要です！

除草剤処理後7日間は給水しない「止水管理」を行うと、除草剤処理層がしっかり形成され、十分な除草（抑草）効果が得られるヨ！

～～営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ～～

次回稲作情報：5月下旬「中干し開始・終了の目安、葉もち防除、中後期雑草防除」（予定）